★チラシに込めた想い“作成担当者（元運転者）”★

エピソード１

～　ただ運転が好きといった理由だけで入局した交通局　～

交通局に入局する前も大型に乗っていたので
運転に関しては何も緊張感はなかったが
その甘い考えが一変する
レベル高い接客・接遇、そこに運転技術
自分自身器用な方ではないためか
車内・車外の安全確認、案内放送、接客、運転操作すべてが同時進行
試行錯誤の連続だった記憶しかない

長い研修を終え、初めての一人乗務、緊張しながら若戸大橋を運行したことは、今も鮮明に覚えている
当時はバス利用者がとても多く、一部の路線では通勤通学時間帯の臨時便がでる程だった。
そのため運行が遅れ、お客様にお叱りを受けることもあったが
お客様からのあたたかい声も沢山あった。その中でも「あんた運転上手だね」この言葉が一番印象に残っている

同年代の仲間も沢山いる職場で、それなりに楽しく緊張感もって運転業務に徹していたが、ある日、異動で状況が変わる

エピソード２

～　ドライバーから事務仕事へ　～

そこは事故や苦情、新人の教育をするところである。それには、同僚と笑った
どちらかといえば、してはいけないことをしたくなるタイプ　そんなお堅いところで勤まるのか、といった会話したことを覚えている

覚悟を決め、新たな職場で頑張る

ただ、そこには鬼軍曹のような上司がいた。普段はとても優しいが怒ると人が変わったかのように鬼へと変身する　そんな上司から、お客様の安心・安全を確保するために「優しさだけではダメだ。少しの油断が大事故につながる」と指導教育について、徹底的に教わった。しかし、鬼にはなれなかった

そんな数年間も人事異動で
次の職場はデリケートな上司が沢山いる。いままでの体育会系とは少し印象が違う
そんな職場で交通局の内情を知ることになる

エピソード３

～　さらなる異動で管理部門へ　経営状況がピンチ！　～

バス利用者が少なくなっていることは分かっていたが、このままでは・・・
交通局の存続ができない程に激減
コロナの影響なのか、生活スタイルの変化でバス利用する方が減ったのか
そんなことはどうでもいい

このピンチからの脱却が必要である

厳しい状況をのりこえるため、プロジェクトチームをつくり議論を重ねた
交通局の物語は約１００年近くある。その間、多くの方が利用し様々な想い出がつまっている。そんな物語を終わらせることはできない。
ただ、どう改善しピンチから脱却する方法がわからない
満足いく経営状況で運行している時は、こんな議論はなかったはずだ
ある意味、スキルアップを踏まえ、自分自身にも良い経験であることは間違いない
いままでは削減するしか改善方法がなかったが
それは逆効果なのかもしれない
プラス思考も大事である。減らしてだめなら増やしてみる。そんな改善も価値がある。
減らすことよりも増やすことを考えた方がやりがいは上がる

手探り状態の中、まずはチラシ・ポスターで交通局の現状を知ってもらいたい

エピソード４

～　市営バス乗っている人は「あと月に２回」　～
～　乗っていない人は「月に２回」　～

ここからはバスを利用しやすい環境をつくっていくために（安らぎある市営バス）
交通局全職員でピンチから脱却するために
交通局の物語を後世に伝えていくために
市民の幸せを運ぶために
全職員で交通局の物語を続けていく　　・・・